特集

ひつじ

十二支のなかで、今年の干支であるひつじ（未）は、いささか影の薄い存在であるかもしれない。じつはみんぱくの収蔵品に、ひつじの毛や皮でつくったものはあまたあれど、ひつじそのものの姿をかたどったものは非常に少ないのである。それはこの動物が頭から尻尾まであまさず活用され、捨てる部位などないという事実を反映しているのだろうか。人類の生活に欠かすことのできないひつじにまつわる、さまざまな物語をお楽しみいただきたい。

ひつじが聖なる動物となるとき
――モンゴル・ブリヤートのシャーマニズム儀礼

島村一平（しまむらいっぺい）
滋賀県立大学准教授

家畜に過ぎないけもの

遊牧を基層文化にもつモンゴルの人びとにとって、ひつじとはひとえに「食用家畜」である。遊牧民は、毎日のようにひつじ肉入りのうどんを食する。ひつじは、彼らにとって食料以上でもなければ、それ以下でもない。これに対してかつてモンゴルやシベリアの狩猟・牧畜民たちが森の主や精霊として崇めてきたのは、鹿や熊、鷲といった野生の動物である。こうした野生獣は、食物連鎖の頂点周辺に位置し触れがたき存在（可食可能性の低い貴重な食料）であるがゆえに「聖なる動物」であったのだろう。しかし、ひつじは家畜に過ぎない。家畜は、人間の管理下にあるがゆえに敬意を表されることもなければ、「神の使い」として崇敬の対象となることもないのである。

そんなひつじが「野生獣」並みの扱いを受けて「聖なる動物」と化する瞬間がある。それが、シャーマンのイニシエーションのなかでおこなわれる供儀儀礼のときである。

ひつじを放牧に出す遊牧民。2005年、モンゴル国ドルノド県

シャーマニズム儀礼において通常のウルルフと異なるのは、それから先の解体のやり方である。通常はひつじが絶命した後、皮と肉のあいだにつめをたてて皮を剥ぎ、頭や四本の足をナイフで切り取った後、解体を始める。ところがシャーマンの儀礼においては、皮を剥がれた後、頭部とそれにつながる食道、気管、肺、心臓がつながったままの状態のものが体からすぽっと取り出されるのである。ブリヤートの人びとは、この頭と内蔵がつながったものを「ジュルド」とよぶ。ジュルドは儀礼が終わった後、食されることはなく火にくべられて神々や精霊に捧げられる。ブリヤートの狩猟・牧畜民たちは、ここに動物の魂がやどると信じてきたのである。

家畜を野生獣に

じつは、この「ジュルド」という言葉の来歴は古い。一四世紀中葉に成立した『元朝秘史』一巻の一三には、森の狩猟民たるウリヤンカイ人が鹿のジュルドと毛皮以外の焼いた肉をチンギス・ハーンの先祖のドブン・メルゲンに与えたことが記されている。ジュルドが本来、野生獣を屠るときの方法であったことを示すエピソードである。

ブリヤートのシャーマニズムの儀礼では、シャーマンの位階が上がれば上がるほど、神々に捧げるために、ジュルドにされる動物は、ひつじから馬へ、最終的には野生獣たる鹿となっていく。位階の高さが彼らにとっての「聖性」と比例していると考えるならば、鹿こそがブリヤートのシャーマンたちにとってもっとも聖なる犠牲獣だといえよう。

とまれ、ひつじはシャーマニズム儀礼においては、聖なる野生獣として屠られるのである。じつは、こうした「家畜を野生獣として扱う」習俗は、紀元前にまで遡ることができる。例えばシベリアのアルタイ山地のパジリク古墳群（紀元前五世紀）からは、鹿の角のような頭飾りで飾りたてられた馬の遺骸が発見されている。家畜をわざわざ野生獣とみなしているという点において、「鹿化した馬」はひつじのジュルドに通底する発想法だといえよう。

翻って現在、ブリヤートの人びとは、ひつじを家畜としてあしらいながらも、その一方で野生獣のように聖なる命が宿っているとみなしている。彼らは今なお、そうしたアルカイックな感覚をもちあわせているのかもしれない。

鹿化した馬。
R. Rolle, *The World of the Scythians*, Batsford: London 1989＜Horse no.10＞より

捧げられるひつじ

ロシアの東シベリアからモンゴル、中国内モンゴルに跨って暮らすモンゴル系のブリヤート人のあいだでは、シャーマニズムが篤く信仰されている。このシャーマン儀礼において、ひつじは、神々や精霊たちの捧げものにされる際、通常の食用の際の屠り方とは異なり、「聖なる野生動物」として扱われるのである。

儀礼において、ひつじはまず香で清められたのち、椀に入った牛乳を飲まされる。次に四本の蹄とこめかみにバターが塗りつけられる。それからひつじはフェルトの敷物の上に仰向けにさせられ腹部に牛乳がそそがれる。その後、供物係の男性がみぞおちにナイフを入れ、動脈を切断するのである。ひつじの血は腹腔にたまるので血が吹き出ることもない。血は大地に一滴もこぼれることがない。このような動物の屠り方のことをモンゴル語で「ウルルフ」という。ウルルフはモンゴル遊牧民にとって伝統的な通常の食肉のための方法でもある。

上：シャーマン儀礼においてひつじを屠る少年。2000年、モンゴル国ドルノド県
下：冬。食用のひつじを運ぶブリヤートの男たち。2001年

ゴワゴワを活かす
――ネパールの羊毛加工から

上羽陽子（うえばようこ）　民博　文化資源研究センター

硬いバルワール種の羊毛

ヒツジの毛というと、わたしたちは柔らかい羊毛製品を思い浮かべるかもしれない。それらの多くは品種改良されてきたスペイン原産のメリノ種である。

一方で、ゴワゴワとした粗い毛の利用というものも世界各地でみることができる。それらは、おもに肉や乳、油、皮などを販売目的として飼養されているヒツジ種である。そのため、毛の品種改良はすすんでおらず、粗毛であるが、副産物として利用されている。

例えば、東ネパールでは、牧畜民が着用する羊毛製の防寒防雨具や敷物がある。このヒツジはバルワール種とよばれる品種で、標高四〇〇〇メートルのヒマラヤ高地から標高六五〇メートルのアッサムまで分布している。この種は、おもに肉の利用を目的として飼養される。そのため、バルワール種の毛は、メリノ種に比べると短く硬くてガサガサしており、メリノ種のように、柔らかな糸をつくることは不可能である。しかし、バルワール種を飼養しているグルンの人びとは、この毛の特性を活（い）かして、刈りとった毛で糸を紡ぎ、「織フェルト技術」で、防寒具や敷物を製作し、副業として現金収入を得ている。

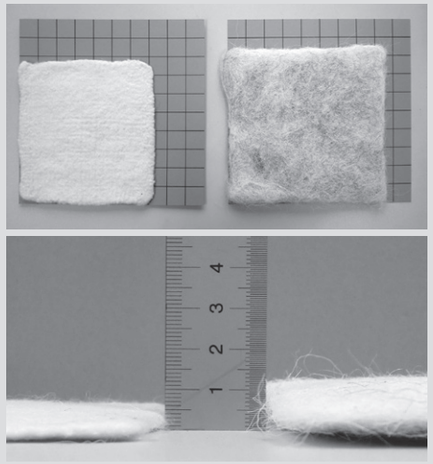
圧縮フェルトと織フェルト

フェルトとは羊毛をはじめとする動物繊維に、熱、水分、圧力、摩擦による刺激を加えて、繊維同士を絡み合わせて、縮絨（しゅくじゅう）（フェルト化）し、シート状にしたものをさす。イランやモンゴルなどで広くおこなわれているのは、繊維を重ねて層にして縮絨する圧縮フェルトである。ネパールなどにみられるのは、織ってから縮絨する織フェルトである。

バルワール種の毛で紡いだ糸で敷物を織るグルン女性

織り上がった布を、熱湯をかけながらフェルト化してゆく

メリノ種とバルワール種の縮絨率比較実験（20グラム、20×20cm）
（左）メリノ種　15cm×15.5cm（縮絨率 25％）厚さ0.6cm
（右）バルワール種　16cm×17cm（縮絨率 15〜20％）厚さ1.3cm



圧縮フェルトは、仕上がりの形を想定し、繊維を重ねて層をつくりながら縮絨してゆく。大きなものをつくるには、スペースと人手が必要である。一方、織フェルトは、糸にする手間はかかるものの、狭い空間でかつ一人でできる。村に残って農作業しながら留守を預かる女性たちにとって、農閑期の副業としてはもってこいの技術である。

また、柔らかくしなやかなメリノ種は、圧縮フェルト技術でも、縮絨する比率が高く、固くしっかりとした布状となる。一方、バルワール種は、繊維の絡み合いが少ないため、縮絨率が低く、圧縮フェルトにすると、ふんわりとやわらかい布状になってしまうため、敷物としての強度がない。

短所を長所にする

グルンの女性たちは、このバルワール種の特性を活かして、織りフェルト技術によって防寒着や敷物を製作しているのだ。バルワール種は、繊維が硬くて太いので、糸も太くなり、それを織ると織り目が粗い布ができる。さらにその後、織り上げた布に、熱湯をかけながら、何時間も足でもみほぐす。すると、繊維と繊維が絡まりあって、固くしっかりとした布状へと変化する。

バルワール種でつくった布は、メリノ種のものと比べて、粗毛独特の厚みと弾力があり、雨もはじくという利点がある。グルンの人びとは、繊維利用に不向きなバルワール種の欠点を、織フェルトという技術を選択することによって長所に変え、その特性を活かした布つくりを実践しているのだ。

副業として製作した敷物や防寒着を定期市で販売するグルンの仲介人

現代に生きる古代の紙「羊皮紙」

八木（やぎ）健治（けんじ）　羊皮紙工房主宰

羊皮紙でできたトーラー（奥）、メズザー（右）、テフィリン（左）。筆者蔵

歴史を変えた羊の紙

動物園の「ふれあい広場」でモコモコの羊に触れて、「そうだ、ここに文字を書こう！」と思うだろうか。この突拍子もない発想を形にし、本の歴史に一大革命を起こしたのが、紀元前二世紀のペルガモン（現トルコのベルガマ）であると言われている。羊皮紙の発祥については諸説あるが、元々パピルスをエジプトから輸入していたペルガモンが、パピルスの輸出停止に伴い、仕方なく動物の皮に文字を書いたという。その後羊皮紙はパピルスを駆逐して約千五百年ものあいだ、西洋におけるおもな書写素材として利用されてきた。製紙法の発展と一五世紀の印刷術の発明により、製造に時間と手間のかかる羊皮紙は衰退していった。

羊皮紙づくり

羊皮紙づくりは過酷だ。わたしは北海道の牧場から羊の生皮をとりよせて羊皮紙を作り販売していたが、手作業では労力のかかるキツイ仕事である。生皮を石灰水に約一週間漬けておくと表皮が分解されて毛が抜ける。すっぱいニオイの腐敗臭に耐えながら毛をムシムシと剥（は）いでゆく。脱毛した皮を再度石灰につけて脂を抜き、木枠に張りつけて半円ナイフで肉や脂肪をこそげとる。全身を使った上下運動で案外体力を使う作業だ。乾燥後、穴を空けないよう細心の注意を払い、軽石などで磨いて薄く滑らかにする。毛と肉と脂肪に覆われていた分厚い皮が、最終的にはペラペラな「紙」になるのだ。Ａ４サイズが約六枚とれる一頭分を仕上げるのに約一か月かかる。二万円近くで販売しても、手作業では時給にすると五百円にも満たない。羊皮紙が紙に駆逐されたのも大いに納得できる。逆にこの素材が紀元前から千五百年以上使われ続けていたほうが不思議だ。

現代の羊皮紙大国

羊皮紙は絶滅してしまったのであろうか。いや、現在でも使用されている場所がある。イギリス国会では法案を羊皮紙に印刷して保管する。エリザベス女王のスピーチ原稿、ウィリアム王子の結婚証明書も羊皮紙だ。バチカンの教皇庁も現役の羊皮紙ユーザーである。今世界には、筆者が調べた範囲で約三十か所の羊皮紙製造所がある。その多くはヨーロッパだが、十数か所集まっている国がある。それはイスラエルだ。

ユダヤ教の経典「トーラー」をはじめ、旧約聖書エステル記の巻物、ユダヤ教徒の家の玄関にとりつけられている「メズザー」という護符、敬虔（けいけん）なユダヤ教徒が額と腕につけている黒い小箱「テフィリン」に入っている極小の巻物、それらすべてが今でも羊皮紙で作られ、使用されているのだ。エルサレムの街を歩いていると、土産屋にも羊皮紙の巻物やアート作品が売られている。普通の紙とさほど変わらないため、意識していないと見過ごしてしまう。ユダヤ教は羊皮紙作成に関する宗教的規定がある。その規定に則（のっと）って作られた羊皮紙のみが「クラフ・コシェル（清浄な羊皮紙）」として使用される。見学したベト・シェメシュの羊皮紙工場では、通常の羊皮紙は三か月乾燥、トーラー用は半年乾燥し「熟成」させるのだそうだ。宗教的規定を守りつつも、すべて手作業ではビジネスとして成り立たない。この工場では大型マシンで一瞬にして毛を剥ぎ肉を削ぎ、電動グラインダーで薄く削り、イタリア製の研磨機で最終仕上げをおこなっている。

日本での動き

現在、わたしは羊皮紙の輸入販売に携わるなかで、日本でも羊皮紙の利用が着実に増えていることを実感している。西洋古典技法の作品制作だけでなく、現代アートや日本の伝統工芸の素材として、またファッションやインテリアの分野で「古くて新しい素材」として実験的にではあるが使われ始めている。また北海道で廃棄処分の憂き目にあっている羊の皮を、羊皮紙として地域の特産品にしようという動きも出ている。ひつじ年の今年は、「ひつじのまち」として知られる北海道士別市の有志が、羊皮紙発祥の地ペルガモンを訪問し、羊皮紙を通じた交流を図る予定である。羊皮紙は二千年経った今でも新しい形で生き続けている。

電動グラインダーで削る現代の工場（イスラエルのベト・シェメシュ）

ベルガマ（ペルガモン）の羊皮紙ショップ

エルサレムの羊皮紙アート（右は筆者）

今年はヤギ年

樫永（かしなが） 真佐夫（まさお）　民博 研究戦略センター

東南アジアの「未」はヤギ

周知のとおり、日本の十二支にネコはない。しかし中国でもベトナムでも「卯」はウサギではなく、ネコだ。「未」だってどこでもヒツジだと思っていると大間違い。ベトナム、ラオス、タイでは、なんとヤギなのだ。

ベトナム民間文化研究所のチュー・スアン・ザオ氏に訊（き）いたところ、「未」がヤギである由来譚（たん）などはとくに思いあたらないと言う。古来ベトナムにヒツジがいなくて、ヤギしか飼養しなかったからだろうか。それなら日本の十二支にトラやヒツジがいるのも奇妙だ。だが日本で「亥」がブタからイノシシになったように、ベトナムではヤギが栄えあるヒツジの代役を仰せつかったのだろうか。はっきりしたことはわからない。

大人の食事

多民族国家ベトナムの西北部にくらし、タイ語系のことばを話す黒タイ、白タイのあいだでも、十二支は暦、祈禱（きとう）、呪術に用いられている。かれらは十二支の八番目を「モット」とよぶ。日常語で「蟻」を意味する語だ。しかし、なぜか十二支ではベトナム語の「未（ムイ）」にあたり、だからヤギだと理解されている。

ではヤギはベトナムで人びとの生活とどのようにかかわっているのだろうか。

海岸平野の村落で、ヤギはあまり見ない。むしろ丘陵地や山地で、少数民族の村人が放し飼いしているのを見ることが多い。ベトナム人にとって日常食というより、どちらかというと精力増強効果のあるごちそうであり、大人の食事だ。焼いたり、茹（ゆ）でたり、鍋にしたり、調理法はさまざまである。

そういえば、こんなヤギとのつながりを思い出した。ベトナムでナスと言えば、ふつう白くて丸い小ナスのことだ。では、日本でよくみるあのナスは？　これも精力がつくのか、ベトナム語でも黒タイ語でも「ヤギのきんたまナス！」。

夢での再会

もう一五年以上前、黒タイの村における思い出である。村の長老が、夢で青春時代に愛し合った女性に再会した。遠くの村で家族をつくり、すでに亡くなっていた彼女の供養のために、長老は儀礼を開催した。

三日三晩続く儀礼のクライマックスは、ヤギの供犠だった。祈禱師に招かれた良い精霊、悪い精霊、魑魅魍魎（ちみもうりょう）すべてが集合している深夜の戸外で、村人がヤギの頸（けい）動脈に刃を立てる。生き血に塩を入れた茶碗ひとつを、儀礼の参加者が順番に回し飲む。いつまでも唇に残る生ぬるい血糊（ちのり）の不快さは、しかし村の一員として受け入れてもらっている満足にくらべれば小さいものだった。

懐中電灯の明かりだけでヤギを供犠する

ベトナムの山地で放し飼いされているヤギ

わたしの隣人、羊たち

ワイマテ宣教所にあった農場の風景。キプリアン・ブリッジ（1807―1885）によるスケッチ。提供 アレキサンダー・ターンブル図書館、ウェリントン、ニュージーランド（Ref. PUBL-0144-1-330）.

ニュージーランド、牧羊の二世紀

ピーター・マシウス　民博 民族社会研究部

ひとりあたり一〇頭

ニュージーランドの羊たちは、狭苦しい囲いの中ではなく、広々とした牧草地で放牧されている。南島のサザン・アルプス山脈の広大な牧場で大きな群れとして飼われている例もあれば、もっと小規模にほかの家畜と一緒に飼われている場合もある。

今から二〇〇年前の一八一四年、イギリス人宣教師のサミュエル・マースデンが、ニュージーランドに最初の羊を連れてきた。一八三一年、マースデンの要請によってワイマテ・ノースにモデル牧場がつくられたが、その創設者となったのは、篤農家であり宣教師であったわたしの祖先、リチャード・デイヴィスである。その後一九世紀を通じて、オーストラリアやイギリスからさまざまな品種の羊が次々にもたらされた。今日のニュージーランドの牧羊・羊毛産業の基礎はこうして築かれ、今では四〇〇〇万頭の羊が飼われている。これはじつに、ニュージーランド人ひとりあたり、一〇頭の羊を飼っていることになる。

深刻な自然破壊

毛皮の供給源として羊と同様にもたらされたのが、小型の有袋類であるオーストラリア・ポッサムである。ポッサムは原生林のなかで急速に繁殖し、今ではニュージーランドじゅうに住みついている（余談だが、ごく最近になって、ポッサムの毛と羊毛を撚（よ）りあわせることによって、より高品質な毛織物をつくる技術が開発された）。しかしながら、牧草地をつくるための伐採によって、原生林は著しくそこなわれた。羊やその他の家畜、それにポッサムが増えすぎたことで、ニュージーランドの自然環境は深刻な問題に直面している。家畜の排せつ物と化学肥料の混合物が牧草の堆肥にもちいられているのだが、これが牧草地から染み出して水を汚染しているのである。また、残された原生林もポッサムに林冠を食べられてしまい、衰えゆくいっぽうだ。ニュージーランド人は羊と羊毛、それに羊肉を愛してはいる。しかし、生態系のバランスを考慮して牧場経営をおこなうべきだという声が高くなっているのも、事実なのである。